●アクティブ・ラーニング（AL）

教員による一方向的な講義形式の教育ではなく、学生の能動的な学習への参加を取り入れた学習方法。具体的な例としては、グループ・ディスカッションやディベート、グループ・ワーク等を用いた授業が挙げられる。学習者が能動的に学習することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。

●アドミッション・ポリシー（AP）

どのような学生を受け入れるかという入学者の受け入れ方針。大学やその学部等がどのような教育活動を行い、また、どのような能力や適性等を有する学生を求めているかなどについてまとめたものであり、入学者の選抜方法や入試問題の出題内容等にはこの方針が反映されている。

●カリキュラム・ポリシー（CP）

どのような教育を行うかという教育課程編成・実施の方針。各大学がカリキュラム・ポリシーを明確にすることで、教育課程の改善を図っていくことが求められている。

●学修ポートフォリオ

学生が授業で作成したレポートや論文、課題達成のために収集した資料や成績表等の学修成果と、学修の過程において学んだ点や気付いた点等を記録していくもの。学期ごとに自分が履修した授業の記録を残し、学期末に自分自身の成長を振り返って来学期の目標を設定する際などに活用する。また、大学における学修の記録をすべて残しておき、大学で何を学んだか、そのときにどのようなことを考えたか等を振り返ることで、就職活動においても活用される。

●キャップ制（CAP制）

学生が1年間（または1学期）に履修登録できる単位数の上限を定める制度。適正な教育環境を実現するために考えられた。学生の受講登録の濫用を防ぎ、教室の収容人数と受講者数との調整を容易にすることができる。

●自己点検・評価

大学が、自らの目的・目標に照らして教育研究活動等の状況について点検し、優れている点や改善すべき点等を評価し、その結果を公表するとともに、その結果を踏まえて改善向上を行っていく質保証の仕組み。2002年には、大学の自己点検及び結果の公表の義務が法律上明示されている。

●シラバス

各授業科目の詳細な授業計画。一般に大学の授業名、担当教員名、講義目的、各回の授業内容、成績評価方法・基準、準備学習等についての具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等が記されており、学生が各授業科目の準備学習を進めるための基本となるもの。また、学生が履修科目を決める際の資料になるとともに、教員相互の授業内容の調整、学生による授業評価等にも使われる。

●スタッフ・ディベロップメント（SD）

事務職員や技術職員など教職員全員を対象とした、大学等の管理運営や教育・研究支援までを含めた資質向上のための組織的な取り組み。

●大学教育再生加速プログラム（AP）

国として進めるべき大学教育改革を一層推進するため、教育再生実行会議等で示された新たな方向性に合致した先進的な取り組みを実施する大学を支援することを目的とした事業。

APはAcceleration Program for University Education Rebuildingの略。

●ディプロマ・ポリシー（DP）

どのような人材として社会に送り出すかという学位授与の方針。各大学がディプロマ・ポリシーを明確にすることで、大学のいわゆる「出口管理」の強化を図っていくことが求められている。

●ファカルティ・ディベロップメント(FD)

教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組み。具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための高等教育に関するワークショップの開催等が挙げられる。なお、FDという名称は必ずしも世界標準ではなく、Educational Development や Academic Development などと呼ぶ国もある。

●ラーニング・コモンズ

複数の学生が集まって、電子情報や印刷物等のさまざまな情報資源を使って議論しながら学ぶための「場」を提供するもの。大学図書館等において設けられている。コンピュータ設備や印刷物を提供するだけでなく、それらを使った学生の自学自習を支援する図書館職員等によるサービスも提供する。グループ活動エリア、プレゼンテーションエリア等、個人の自習環境に加えグループワークにも適した学習環境を指す。

●ルーブリック

「学生が何を学修するのか」または「学修活動に応じた学修目標」を縦軸(評価基準)に置き、それに対し「学生が到達しているレベルを示す特徴を記述したもの」を数段階に分けて横軸(評価基準)に置き、マトリクスにしたものを使って学生の学修成果を評価する方法。アメリカで開発された学修成果の評価方法の一つ。テストによる学修成果の評価では、知識や理解度は評価できるが、思考・判断、関心・意欲、態度、技能・表現については評価しづらかったために、このような評価方法が導入された。あらかじめ評価の基準が示されていることから、評価する側と評価される側の認識が共有される、複数の評価者による評価のズレを防ぐことができる等の長所がある。レポートの評価、学生の活動や作品・演出・実験の評価、プレゼンテーションやグループ活動の評価等で活用されることがある。アメリカでは、複数の大学間で共通に活用することが可能な評価指標の開発が進められている。

●GPA

Grade Point Averageの略。授業科目ごとの成績評価を、例えば5段階(A、B、C、D、E)で評価し、それぞれに対して、4・3・2・1・0のようにグレード・ポイント(GP)を付与し、このポイントの平均を算出し、その平均点をもって評価する学修成果の評価方法。GPの段階は国や大学により各々で、10段階程度となっている事例もある。GPAによる評価方法が具体的に活用される場合としては、進級判定の基準、卒業(修了)判定の基準、学生に対する個別の学修指導、奨学金や授業料免除対象者の選定基準、履修上限単位数の設定、授業科目の履修者の要件、各教員間・授業科目間の成績評価基準の平準化等がある。

●IR

Institutional Researchの略。大学内において企画立案、政策形成、意思決定を支援する情報の収集・分析をするために行う活動。学内に散在しているさまざまな情報を収集して数値化・可視化し、評価指標として管理し、教育・研究、経営、学生支援等の活動に分析結果を役立てる。

●PBL

PBLには、「problem-based learning」と「project-based learning」があり、両者の定義や使い分けについては統一されていない。どちらも、学習者が問題を発見し、その問題を解決するために様々な努力をする過程で、経験や知識を得ていく学習方法。「課題解決型学習」、「問題解決型学習」などとも呼ばれる。これまでの、いわゆる「座学」や情報・技能修得重視のインプット型の教育と対比されて語られることが多い。